

京 都 大 学

エネルギー科学広報

Graduate School of Energy Science
Kyoto University

平成10年 5 月

目 次

{巻頭言}

重責に思う (研究科長 伊藤 靖彦) 1

{随 想}

アイデンティティの確立 (名誉教授 西原 英晃) 3

{解 説}

エネルギー科学研究科における教育・研究環境の充実化に関する

調査研究 (教授 八田 夏夫) 5

修士修了者の進路について (教授 池上 詢) 8

{諸 報}

招へい外国人学者等 11

受託研究、共同研究 12

科学研究費補助金 13

特別講演 14

入学状況、人事異動 15

修了状況等 (集合写真) 16

学位授与状況 17

新任教員紹介 18

教官配置一覧表 19

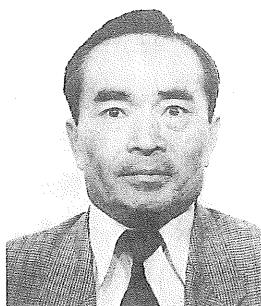
日 誌 20

編集後記 21

◆巻頭言◆

重責に思う

エネルギー科学研究科長 伊藤 靖彦



エネルギー科学研究科は、新しいエネルギー科学の学域の創生、エネルギー科学の専門的学識をもつ人材の養成、社会との連携の強化および社会人などの再教育、などを目標に掲げ、平成8年5月11日に発足しました。創設に関わる本格的な準備は平成4年頃から進んでいたもので、その期間を含めると、創設の機運が高まってから、すでに丸6年が経過していることにもなります。

誕生してからはや3年目に入りましたが、基幹講座と協力講座の緊密な連携のもと、客員教官等の協力も得ながら、着々と教育・研究活動を展開しつつあり、周囲の評価も日増しに高まっていることは、ご同慶の至りです。

しかし、まだまだ解決しなければならない多くの難問を抱えていることも事実です。ここでは具体例はあげませんが、これらの難問の多くは、未だに本研究科独自の建物を持たず、実現の見通しが立っていないことから派生しています。仏教の因縁の教えを引くまでもなく、適切な環境に恵まれなければ、いかに素質に恵まれ、可能性を秘めた種であっても、成長して花を咲かせ、実を結ぶことができません。自助努力だけでは如何ともし難いこともあります。人間においては、「三つ子の魂百まで」の例え通り、3才までに人間性や人格、能力の大枠がほぼ決まってしまうと言われていますが、組織についても同様でしょう。創設3年目を迎えたいま、本研究科の教育・研究活動の基盤の確立のため、総長を始めとする京都大学の皆様と文部省関係各位のご理解を得て、何としても独自の建物を実現しなければなりません。

この悲願の成就を念じるとき、3年目にして研究科長の重責を引き継いだことの意味の大きさに思い至り、改めて肅然と襟を正さざるを得ません。

勿論、私一人で深刻がっていても無力です。本研究科の教職員・学生が一丸となって、この問題に立ち向かい、実現への大きな潮流を生み出していかねばなりません。

平成10年3月に1期生として社会に巣立っていった学生諸君、また在学中の学生諸君が、将来、「私はエネルギー科学研究科の卒業生でございます」と、自信と誇りに満ちて言えるように、そして、周囲の人々からもそれを敬意をもって認めて貰えるように、教育環境を充実させ研究業績をあげていくことが、我々全員の務めでしょう。そのための必要条件が独自の建物の実現であることを、重ねて強調しておきたいと思います。建物問題は、本研究科が抱える多くの課題の「象徴」と位置づけられます。

一方、環境の不備を理由に自らの研鑽を怠らぬよう、教職員、学生を問わず自戒したいものです。エネルギー基礎科学専攻のY教授は、素晴らしい研究はどのような環境からも生まれ得るものであるとし、その例として、キュリー夫妻がラジウムを発見したのは、体育館の倉庫に作った実験室であったと述べておられます。耳は痛いですが傾聴に値します。教官、学生の一人一人が、自らの哲学を踏まえて研鑽を積み、優れた研究成果をあげることが、本研究科のレピュテーションを高め、教育研究環境の整備・充実にもつながっていくという筋書きについては、誰しも異論のないところでしょう。

その意味では、私もまだまだ研究者としても頑張りたいと思っています。では、研究者として何ができるのか、と問われるでしょう。私もそう自

問自答します。この自問自答をしているときの方が建物問題に頭を悩ませているときよりも楽しく、充実していることを、率直に告白しておかなければなりません。「今の趣味は？」と問われれば、迷わず「研究です」と答えたいと思います。

一研究者の立場に戻るとき、私はエネルギー基礎科学専攻の一員として考えるようになります。エネルギー基礎科学専攻を構成する14分野がカバーする領域は多岐にわたりますが、電子、イオン、プラズマ、中性子、光量子などの振る舞いを様々な角度から解明し、エネルギーの発生、変換、輸送、貯蔵、利用に関わるプロセスや材料の開発につなげていくという、エネルギー基礎科学専攻の目標の大きな枠組みの中で、それぞれの分野にそれぞれの役割が期待されているといえるでしょう。

その中で、私どもの研究室では、太陽光、原子力、化学エネルギーの変換と利用に関わる「プロセス」や「物質」を視野に入れつつ、次のような研究テーマに取り組んでいます。

- (1) 燃料電池、水素エネルギーシステムなどの電気化学的エネルギー変換
- (2) 熔融塩の物性・化学とエネルギー変換プロセスへの応用
- (3) マテリアル・テラリングによる新規な機能材料の創製と応用
- (4) プラズマ、イオンビームなどと電気化学の境界領域の開拓
- (5) レーザーラマン分光、中性子回折などによる物質構造の解明

いずれの研究にも学生が極めて重要な役割を担っており、それぞれが各自のアイデアを活かして

マイペースで研究を進めていますが、その中で、エネルギーに関する素養や研究姿勢、実験技術などを着実に身につけていってくれているのが分かり、頼もしい限りです。その様子に接するにつけ、エネルギー科学研究科ができて良かったな、としみじみと思います。他の教官の方々もそれぞれの研究室で同様の感懷をお持ちであろうと思います。

しかし、一方では、それぞれの分野が現在の専門分野にとらわれず、他の分野の専門領域を積極的に取り込んで学問領域の融合を図り、新たな展望を切り拓く努力を続けることも大きな意義があるように思われます。例えば、私どもの「エネルギー化学」の分野では、「熔融塩の科学と応用」を柱の一つとしていますが、熔融塩を「凝縮プラズマ」という概念で捉え直すと、熔融塩の本性や物性、応用について、プラズマに関連した物理学の分野から様々な示唆を得られそうだとの予感があります。また、プラズマ物理学の知見を積極的に取り込んで、プラズマ化学プロセスによるエネルギー材料創製などにも新たな指針を見出す可能性があると考えています。

夢は尽きませんが、現役としての残された時間、自己の教育研究活動と組織としてのエネルギー科学研究科の基盤固めの双方で、非力を顧みず、瘦身に鞭打って精一杯の努力を重ねる所存です。

生真面目に力みすぎてしまったとの反省はありますが、問題意識・使命感が片時も脳裏を離れないという、現在の心境を率直に述べたつもりです。「忘れねばこそ思い出さず候」という花魁の恋文の一節が、状況を越えて胸にしみてきます。

◆ 随 想 ◆

アイデンティティの確立

名誉教授 西 原 英 晃



過日、本学創立百周年の記念式典で東京大学総長蓮實重彦先生はその祝辞の中で次のように述べられた。少々長くなるが、この引用から始めてみたい。

京都大学は、個人主義とも集団主義とも異なるきわめてユニークな組織の原理を、いたるところに育んでこられました。それは、複数であることが単数であることといささかも矛盾することのない独得の原理であり、これが、他の大学には模倣しがたい貴重な《知》的資産を、時間を超えてかたちづけてきたのであります。・・・京都大学における《知》の組織原理は、究明されるべき問題でも、それにふさわしい解答でもなく、新たな問題体系を視界に浮上させ、それを複数の存在が思い思いの手法で思考するというプロセスそのものにおいて、独創性を発揮するものだったからであります。

(傍点筆者)

蓮實総長の、通常の祝辞のフォーマットを超えた「講義」を拝聴して、私は目からうろこが落ちる思いをした。共同利用を軸とする本学の多々ある研究所（その一つである大変ユニークな存在の原子炉実験所に私は十九年間奉職した）と、とくに最近になって「重点化」された研究科との関係。また、われわれの主題である、これもユニークなエネルギー科学研究科の誕生過程で思い悩んでいたことは、実は問題でも解答でもない、ということであったからである。

しかし美しい蓮實総長の祝辞の真意は、これからの京都大学の（これはエネルギー科学研究科の、

と読み替えてもよい）課題を示唆する。現在わが国の大学の置かれている状況は、蓮實総長がいわれるように、「息詰まる閉塞状態」にある。このような状況の中で三年目を迎えたわが研究科は何をなすべきであろうか。私はそれをアイデンティティの確立、といたい。

研究科の出しているパンフレットにあるマトリックス表、縦に専攻、講座、分野、教官名が並び、横に工学系、農学系、理学系、経済学系……と既存の（しかもさらに細分化された）学問体系の名前が書かれている、あの表のことであるが、これは実にうまくできている。既存のディシプリンの中で新たな展開を模索した設置準備委員会の諸兄の労作である。研究科ができて三年目では自己評価するのはまだ早いかもしれないが、このマトリックス表など設置準備のときの枠組みに照らして研究科将来の発展のために省察を加えることが必要であろう。蓮實総長から頂いた評価の真意を理解しなければならない。自由な学風の中で、「いくつもの異質な個体同士の出会いを通して、個のたんなる総合とは異なる独得な《知》の濃度を醸成することに成功」したという評価に値しないケースをわれわれは多く、そしてこの研究科を生んだ土壌の中で、見てきているからである。

たとえ狗肉が美味であったとしても、羊頭を店頭に掲げた店舗には客は集まらない。枠組みと中身とはえてして矛盾するものであり、それが一致してしまえば新たな展望は望めないのが世の摂理であるかも知れないが、枠組みを示して出発した時点ではそれにふさわしいアイデンティティをまず構築し、その成果を部外に説明する義務がある。まだ成果をじゅうぶん世に問うていない今の時点で枠組みについて云々することは厳に慎むべきことであろう。一時研究科の中で学位の呼称につい

ての議論があったが、どうやら収まったようである。

しかし、個性はいきなり何もないところから誕生するものではない。それがはぐくまれる土壌が必要である。生物でいうと個体の特質は親から遺伝子の形で次世代に受け継がれる。本学の自由闊達な基盤あってこそその研究科の誕生である。われわれは既存の枠組みの中で育った優れた《知》を継承し、新しい枠組みの中で新たな展開を試みているのである。以前読んだ雑誌記事に、中国人とユダヤ人とが協力してニューヨークのWASPを主人公とした映画を作った話があったが、WASPを意識しないで、中国人という地「ち」で脚本を書いたら、かえって生き生きとした主人公が描けたというようなことだった。新しい枠組みにだけ囚われていたら生き生きとした「作品」は生まれてこない。受け継いだ特質を与えられた枠組みの下でのびのびと発揮することによって、異色なアイデンティティを持った集団が生まれてくるのではないか。枠組みはそれを意識していれば自律的な整枝活動が加わり全体が形づけられる。

このような議論は多くの諸兄姉には無用のことかもしれない。そうであって欲しいと願うものである。私自身についていうと、二年間お預かりした「エネルギー社会教育論」に対するアプローチの仕方に若干行き過ぎがあったか、と反省している。もっとも、これには立ち上げた後二年という短い時間しかなかったため、という弁解を付けている。なにしろ自分で知る限り、他のアカデミア

にはない「エネルギー社会教育論」というような連字符学をコインし、その解釈（今もって完成していない）に悩んできたわけだから。

若干抽象論を展開しすぎたきらいがある。最後に少し具体的な提案をしてみよう。四つの専攻ではこれまでそれぞれ少なくとも一回の修士論文公聴会が開かれたと思う。また、既に幾つかの博士論文も公聴会を経て誕生した。これらが研究科、専攻のアイデンティティの形成にいかにも有効であるかは立ち会われた教官、院生が共通に感じた印象であったであろう。学生の研究発表の場ではあるが、修士論文公聴会は、学生諸君には申し訳ないが、ある意味で研究室（教授）間の代理戦争、と見ることもできる。他の場（既成の学問領域での場）での情報交換がない限り、教官諸賢は他研究室（特に他専攻）の研究内容についてどれほどのことをご存知か。これは決して、熊取という遠隔地にいた私の情報不足の故の見当違いの感想ではあるまい。

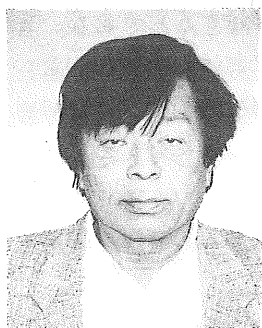
「文芸春秋」で辛口の東大批評をされている立花隆氏が客員教授をされていた生産技術研究所では、教授会に引き続き教授による研究報告がなされているとのことである。私が提案したいのは、まさしくこれである。学生諸君に「特別セミナー」を必修科目として課するのであれば、教官諸賢は研究科の中で研究報告をし、そのレビューを受けるべきであろう。アイデンティティの確立したCOEとして発信するに値する成果は、このような中から生まれるのではなかろうか。

(1998.6.5記)

◆解 説◆

エネルギー科学研究科における教育・
研究環境の充実化に関する調査研究

エネルギー応用科学専攻 八 田 夏 夫



教育研究学内特別経費によるプロジェクト研究は今回で3回目である。これまでの2回のプロジェクト研究によって、当エネルギー科学研究科における教育・研究に関する主要な問題は出つくしたように思う。したがって、今回のプロジェクト

はエネルギー科学研究科における教育・研究環境の充実化を推進するためのガイドラインを短期的かつ長期的な観点から調査研究することを目的とした。

この調査の研究組織はエネルギー科学研究科の基幹および協力講座に所属する教授層全員である。また、本プロジェクト研究の特色は、吉田地区、宇治地区および熊取地区に分散しているキャンパス間の教育（講義や演習）の実態、現状の教育環境の改善、教官および学生間の意志疎通、インターネット利用通信による講義や会議の可能性、そして最近話題になっているエネルギー科学研究科固有の建物に対する意見などを、個人の立場で自由に意見を述べてもらうことにある。

まず、研究科独自の建物をもたず、吉田本部内においても各研究室が分散し、さらに、宇治地区や熊取地区といった遠隔地に基幹講座や協力講座が分散している現状では、教官同志、学生同志あるいは教官と学生間に密な連携、協力を維持することに種々の障害があることの指摘が目立つ。研究室の分散は、討論の機会を減らすどころか、顔を合わすことも稀で、未だ顔と名前が一致し得ないということである。

また、遠隔地に本拠のある教官にとって、吉田地区で行われる講義や会議等は、時間的に極端に

過酷な負担を強いられ、具体的には、午後1時からの講義や会議の場合には、待機時間や移動時間を含めると、半日以上の仕事となる。その結果、時間の浪費のみならず、精力、体力、気力、知力などの消耗の度合が一段と増した、という悲痛ともいえるような実態が報告されている。また、当研究科には講義室がまったくないから他部局から借りている。講義を受ける学生は、講義室を渡り歩いている。講義と講義の間の休憩時間は学生が移動するための時間となっている。講義を時間延長すると、次の講義室に行く時間がないといって学生諸君から抗議を受けることもあるらしい。講義時間終了時になってくると、学生のほうが浮き足立ってくるし、教官側も焦ってくる。このようなことが本当に許されるのか、エネルギー科学研究科の学生が、当のエネルギー科学研究科にどのような印象をもっているのか不安になってくる、という実感が述べられている。

いずれにしても、キャンパスの分散や研究室の分散は教育・研究の場を劣化していることは事実である。分散キャンパスのための情報網として、インターネット利用が期待されたが、事務手続きの煩雑さや技術的未成熟のため、最近ではまったく利用されていない。折角の設備であるから何とか改善を望みたいという意見もあれば、講義や会議には直接顔をつき合わせてやるべきという意見もある。特に、SCSを利用する講義においては、講義に対する学生の反応が読み取りにくく、直接対面して資料や黒板を使って講義の方が望ましい、という意見が述べられているが、それはもっともなことだと考える。SCSを使った会議にしても、デリケートな問題で会議中にあからさまには議論できず、会議の後、誤解を解くために個人的に面談する必要が生ずるとすれば、それは不可能

だという指摘もある。結論的には、通信衛星によるSCS遠隔地講義やSCS遠隔地会議システムの実際の運用は時期尚早という意見が多数を占めているようである。

さて、種々の雑用や事務処理への対応に忙殺されて、本来の教育と研究のための時間が十分取れないという意見がある。これも教官の負担となる雑務が増えて、教育・研究環境が劣化してきていることを示唆している。論文以外の書類の作成も多いし、確かに無駄なアンケート調査が増えてきている。こんなアンケートをとってどうするつもりなのかという下らないアンケートがある。発信する側は一方的であるが、受信する側は他にもいくつもあるので、たまらなく苦痛である。これは明らかに雑務である。その他に、研究室の経理、講義用資料の複写、書類整理、文書作成・送付などがあるが、かつては教室の事務官のきめ細かい支援を受けることができたが、エネルギー科学研究科の（定員削減に起因する）事務機能の貧困さのために、教官自らがやるか大学院生に手伝ってもらわなければならない。このような現状をどのように克服していくのか、というやるせない指摘が報告されている。これは、筆者もまったく同感である。会議も多く、数えればきりがない。教授会、研究科会議、教室会議、専攻会議、コース会議や各種委員を引き受けることによる委員会など、これらすべてに出席するわけにはいかない。

また、学部も含めると入試の回数も多いし、最近大学院が社会に門戸を広げ、多くの人々を受け入れるようになってきている。多くの人が大学院に入学して勉学に励んでくれればよいが、実質的に院生の質が低下し、必要な単位だけをそつなく揃え、就職先を決めれば、後は自由に過ごすのが現代流なのかもしれない、といった諷刺調の論評も報告されている。また、学部教育における取得科目や学習歴の異なった学生に大学院の専門科目を講義し、理解させることが困難なので、基礎理論の不十分な学生を意識して、講義の要所要所で基礎にもどった説明を行っても、講義についてこれない学生がいるとの指摘も報告されている。

このことを逆な視点から見ると、過去の学習基

盤がフラットでないから、院入試のとき、多数の出題科目からいくつかを自主選択して、解答させることになっている。それだけなら許容できるとしても、バックグラウンドの相違による効果が大学院における専門科目の選択に波及している。筆者の担当している科目に多数の履修届を出しているながら、実際に最後まで講義に出席する学生は学部のとくに顔見知りのものがほとんどである。上述のケースのように、学部における学習歴の違いが大きすぎるので、修士1回生の前期を基礎科目の再教育の期間に当ててはどうかと考える。これは学部教育のひずみ取りにもなるし、最近の学生の学力低下の回復にも効果があるのではないかと思う。

さて、今回のプロジェクトの調査研究において、特に主張のつよい問題はエネルギー科学研究科の活動の中心となる建物の確保に集中している。講義室や研究室など教育研究に不可欠な建物をもたないエネルギー科学研究科においては、先に述べたように、教官・学生ともに時間の浪費のみならず、研究意欲や肉体的疲労を強いることとなり、1日も早い研究科独自の建物の整備が望まれている。第3キャンパス問題についても過去の報告書の中でも多くの人が繰り返し意見を述べてきているが、近い将来にある方向付けがなされるとは考え難い。エネルギー科学研究科が発展ある教育研究を行うには、いつになるともわからない第3キャンパスを基本とした計画案は既に時間切れであるという指摘がある。

実際、京都大学の中で独立した一組織である当研究科の建物を将来にわたって誰が保証してくれるのか。文部省に言わせると、研究科をつくりたいと言ってきたので、建物や教官、事務官など金のかかるものは一切面倒を見ないから、つくりたいればつくりなさい、であり、大学当局は当研究科に建物の概算要求を出す意志はまったくなく、工学部敷地内の校舎建て替えは工学研究科に認可された予算であり、したがって現状では誰も我々を支援してくれないことを当研究科の構成員は肝に銘じなければならない、という当研究科の小野勝敏建築特別委員長の苦渋に満ちた報告がある。

本年4月、独立研究科として情報学研究科が創設された。昨年度7月のエネルギー科学研究科教授会の直後、非公式であったと思うが、長尾真工学研究科長（当時）（現総長）が工学研究科の建物に対する見解を述べられた。1つは、第3キャンパスの確保ができるまでエネルギー科学と情報学の両研究科は工学部1号館と2号館に入って貰いたいこと、第2は、これらの建物は何も工学研究科の持物ではないから、建て替えの概算要求を出すのは独立研究科の問題であること、第3は、第3キャンパスの確保が困難視されているが、それが見出せないのなら、京都大学の将来構想を白紙撤回し再検討されなければならないこと、などが述べられた。これらの発言はおそらく現総長の当時の私見ではあるが、確かに第3キャンパスの確保は不可能ではないか。将来、1号館と2号館が完全に空けば、そこにエネルギー科学と情報学の両研究科の建物の構築を可能にするため、両研究科で話し合うことが必要である。聞くところによると、エネルギー科学研究科、情報学研究科および工学研究科からなる三者連絡会があるとか。話し合いの場があることは非常に結構である。お互いにお互いの立場を認め合い、急がずゆっくりと建物の話しを進めてほしい。願わくは、物をその場で決めないことである。情報公開が不可欠である。必ず、研究科に持ち帰って戴きたい。三者連絡会において、お互いに他の研究科の立場をよく理解しあった話し合いであれば、必ず建物の問

題に決着がつこう。

筆者は、京都大学の継承者である若い研究者のために、早い時期にこの問題の決着を望む。というのは、第3キャンパスに期待し続け、それまでの辛抱といわれながら、なかなか実現せず狭い研究室に閉じこめられ、研究業績だけは強制されるような姿を想像したくないからである。あり得ない第3キャンパスが取得できるまでは我慢すべしといわれても、夢も希望も生まれてこない。できることなら、できる限り早い時期に、第3キャンパス問題に終止符をうって、構想そのものをふり出しに戻して、ゼロからの出発を期待したい。21世紀の京都大学を担う若い研究者に将来構想を検討してもらいたいものだ。なぜなら、京都大学は自由な思索と独創的な発展を学風とした教育研究の場であり続けなければならないからである。

以上は、平成9年度学内教育研究経費によるプロジェクトの総括を解説記事として、本研究科の広報に載せたいということを吉田起國基盤整備委員長から依頼されて記述したものである。解説記事は不偏無私が鉄則であるが、少しデビエイトしたかもわからない。御容赦願いたい。

最後に、本調査研究の組織メンバーならびに本プロジェクト課題を認めて戴いた関係各位に深く謝意を表するとともに、本プロジェクトの本当の意味の推進者として労をとって貰ったエネルギー応用科学専攻の鈴木亮輔助教授、楠田啓助教授および藤原弘康助教授に感謝したい。

◆解 説◆

修士修了者の進路について

教育研究委員会委員長 池 上 詢
(エネルギー変換科学専攻)



エネルギー科学研究科は創設後始めて修士課程修了者を本年3月に送り出し、博士後期課程へ進学する者11名を除く106名が社会に巣立って行った。本研究科の第1期生として将来の活躍を大い

に期待している。表1の進路一覧に示すように、研究科全体としては重工業や電機が多く、ついで電器・電子情報機器が多数を占め、総じて製造業への就職者が多い。また、専攻別にみると社会・環境科学専攻は進路にバラエティがあるのに対して、基礎科学専攻は重工業・電機と化学とが多く、変換科学専攻は自動車、重工業・電機などの機械製造が、応用科学専攻は金属・材料が目立ち、専攻のカラーと専門分野が進路に反映している。

本研究科は創設されて日が浅いため社会的認知が不十分で、各専攻の性格もよく理解されていないため、当初は就職にかなり苦慮するのではないかと懸念した。そこで、教官が研究科全体として、あるいは専攻としてより深い認識を企業などから得るように努めて貰った。同時に、学生諸君は第1期生という手探り状態のなかで、よく頑張って自らの進路を切り開く努力をした。これらの甲斐があって比較的スムーズに、かつ大きなトラブルもなく就職先が決まって行った。特定企業に過度に集中しなかったのは、学生の志望先にかなりのバラエティがあったことにもよると思われる。

会社側から見れば、各専攻にどのような特色があって、どのような学生が育つかは分かりにくいので、企業からの求人の際に、学部で受けた教育分野のご希望を書き添えて戴いてもよく、また専攻別でも研究科全体の求人でも構わないことを申

し上げた。就職事務は原則として各専攻で行うことにしていたが、研究科全体の枠を指定してくる企業もあったので、研究教育委員会委員長が主宰する就職担当者会議をもち、4専攻で歩調を合わせて就職事務を司ることになった。

この方針は就職希望の学生にとって就職先に若干の制限となったかもしれないが、多くの会社がフレキシブルに対応して頂いたため、学生諸君は収まるところに収まったようである。しかし、化学系は就職時期が早くて放置すれば就職できない懸念もあったので、抵触しない範囲で研究科全体で決めた推薦開始以前に一部を推薦した。

以上が概要であるが、各専攻で就職業務をご担当戴いた教官の感想、問題点などを自由に記して頂いたので、それを紹介する。なお、基礎科学専攻の担当者は伊藤靖彦教授であったが、今年度担当の八尾 健教授に書いて戴いた。

(1) 社会・環境科学専攻(吉川榮和教授) 研究科が新規発足で知名度がなく、就職先の開拓には、各専攻就職指導担当者が努力した。本専攻についていえば、その名称に文系のイメージが強く、本専攻への求人の申し出が当初は皆無に近かった。そこで電話をかけたおしたが、文系就職は自由応募で、といわれ、技術系学生が実際は多いことを宣伝するなど、学校推薦枠を得るのに苦労した。一方、学生の傾向として、自由応募で就職活動に動くものが多かった。これは本専攻の学生の特質として、出身学部がばらついているため、研究科に学校推薦で求人してくる技術系とは領域がフィットしないと思って、学生が学校推薦を敬遠するようであった。しかし、自由応募で就職運動しても志望先では断られるケースも多々あって、全員の進路確定が9月末まで掛かった。なお、就職先の内定では、学校推薦、自由応募が半々とい

うところであった。昨年の就職指導から受けた印象として、自分の総合性を活かせるところに就職したいと考えて就職活動に臨んでいた学生諸君が目についたが、そのような学生諸君には、総合性を身につけるためには、自分の専門性を高めることがまず肝心なことを自覚して、修士研究に早めに取り組まれることを、個人としてはお勧めしたい。

(2) 基礎科学専攻 (八尾 健教授) エネルギー科学研究科が発足してはじめての就職活動であった。大学の改組の内容について企業に十分理解して頂いているかどうかという不安と、少々大げさではあるが、エネルギー科学研究科の将来がかかっているという気負いもあり、かなりの緊張感を持って臨んだ。教育研究委員会の主導による研究科全体としての求人活動に加え、専攻長が企業への求人依頼を行い、同時に、個々の教官もそれぞれに企業に働きかける、まさに総力戦であった。学生に対しても、既に修士1回生の2月に進路に対するアンケート調査を行うとともに、専攻長自ら個別に全員を面接し、企業情報の提供や志望の相談等、きめ細かい指導を行った。これらの活動が功を奏し、また企業の側も、大学の実状を正確に把握すべく努力していたことも相まって、かなり良い評価が下せる結果であった。この状態を次年度以降にもつないでいくことが重要であろう。問題点も残った。当専攻は学生数が多く、それぞれの所属する分野の研究内容は多岐にわたっている。このため企業に対しては、専攻の更に下の分野にまで下げて細かく専門を知ってもらう労力を課すことになった。また当専攻では、大きく分けて化学系と物理系の分野がほぼ半数ずつある。化学系の企業の求人活動は早く始まり、早く終わる。物理系に比べて、約1~2ヶ月の開きがある。企業に推薦状を出す時期について、化学系の事情をご理解いただくことについて、少々議論があった。これに関しては、今後とも柔軟に対応していただくことを希望する次第である。

(3) 変換科学専攻 (塩路昌宏教授) 就職事務については、研究科内の申し合わせにしたがって、ガイダンス、希望調査、および専攻内・研究科内

での調整を経て、6月3日以降に推薦会社を決めた。その間、希望者が求人数を上回る企業もあったが、いずれも相談の結果、推薦者数を増やして頂けることになった。さらに、研究科求人企業について他専攻と重複することもないので、学生の希望通りの企業に全員推薦できた。当初は、工学研究科など従来からの部局を優先する求人となることを懸念し、実際に電話ないしは面談による説明を要する企業も多かったが、結果的に当専攻学生に不利になる事例はなかった。

以上のように、幸いにして問題は起こらなかったが、化学系分野などの募集時期のずれの調整、研究科求人企業への推薦者を専攻間で決める際の方法、奨学金受給者の扱いなどは不確定なまま残されている。これらは、複数の分野をかかえるエネルギー科学研究科に特有の課題であり、今後とも継続して検討する必要がある。しかし、場合によって状況が異なるので、個々に善後策を協議し、解決を図ることになり、そのためには他専攻の事情を理解して誤解のないよう連絡を密にすることが大切である。また、逆に研究科分野の多様性を生かし、他専攻への求人企業にも希望できる道を拓いて柔軟な運用を考案すれば、学生の選択肢を拡大できることになるので、その方式の協議も有用と考える。

(4) 応用科学専攻 (八田夏夫教授) 修士課程の学生就職に対する認識はずいぶんドライになってきている。現在の日本の経済不況と関係があるのかもわからない。学生は週刊誌に掲載される企業の人気ランキングに敏感である。しかも、企業間の就職協定がないため、企業も学生も就職活動は素早い。学生は業種を選ぶのではなく、企業名で選ぶようになってきている。一般には、鉄鋼、重工、機械あるいは電気などの職種に対する希望があって、その職種の中から一社を決めるのが普通と思っていたが、最初から特定の企業が決まっていて、それが駄目なら全く異業種の企業を選ぶ。

また、学校推薦と自由応募があり、前者を希望しながら、自由応募の他企業にも触手を伸ばす学生がいる。結果として後者から内定を貰っている。まさに、ルール破りであるが、内定通知を貰って

いる以上どうにもならない。

さらに、日本の経済構造の基盤を支えてきたのは製造業であったが、最近はそうではないらしい。かつては、GDPに与える製造業のインパクトは70%を超えていたが、昨今は20%台に低迷している。さらには、借りる側の製造業より貸す側の金

融業の仕事に魅力を感じる学生が増えつつあるのも事実であろう。

就職協定が無くなると、企業側にも学生側にも自由化の波が押し寄せてきて、大学における就職事務もあまりかたくなにならないほうがいいのかもわからない。

表1 平成9年度修士課程修了者の進路一覧

区分	エネルギー 社会・環境	エネルギー 基礎	エネルギー 変換	エネルギー 応用	計
博士後期課程進学	5	2	2	2	11
公務員	3	1			4
電力・ガス	1	3	1	1	6
重工業・電機	2	14	6	2	24
自動車・機械	3		7	3	13
電器・情報処理	7	8	3	2	20
金属・材料	2	1		9	12
化学・繊維	1	9		1	11
その他	3	1		1	5
計	27	39	19	21	106

招へい外国人学者等

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 招へい外国人学者等 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

氏 名・所 属・職	活 動 内 容	受入身分・期間	受 入 教 官
Yusoff Bin Ali マレーシア マレーシア国民大学 上級講師	各種気体燃料を使う内燃機関の 有害排出物低減に関する研究	招へい外国人学者 97.10.15～97.11.13	エネルギー変換科 学専攻 塩路 教授
Alok Awasthi インド バーバ原子力研究所 研究員	タンタル及びニオブの抽出精練 プロセスに関する研究	外国人共同研究者 97.10.24～97.12.22	エネルギー応用科 学専攻 小野 教授
朱 光 華 中華人民共和国 北京師範大学低能核物理研究所 教授	PIXE分析を応用した大気環境研究 についての調査研究	招へい外国人学者 97.11.4～97.11.23	エネルギー社会・ 環境科学専攻 笠原 教授
Azman Zainal Abidin マレーシア マレーシア農科大学 講師	地球温暖化ガスの抑制に関する 調査研究	外国人共同研究者 97.12.1～97.12.14	エネルギー社会・ 環境科学専攻 笠原 教授
Alexander McLean カナダ トロント大学 教授	製鋼反応論の研究	招へい外国人学者 98.1.10～98.5.20	エネルギー応用科 学専攻 岩瀬 教授
Hermuth Horvath オーストリア ウィーン大学実験物理学科 準教授	エアロゾル粒子の大気環境影響に 関する共同研究	招へい外国人学者 98.2.26～98.3.12	エネルギー社会・ 環境科学専攻 笠原 教授
Ritu Mathur インド TATAエネルギー研究所 リサーチアシスタント	インドのエネルギー・環境モデルの 開発とそれを用いての予測シミュ レーション	外国人共同研究者 98.3.21～98.5.14	エネルギー社会・ 環境科学専攻 手塚 助教授
黄 克 智 中華人民共和国 清華大学工程力学系 教授	相変態を伴う熱塑性材料の微視・ 巨視力学	招へい外国人学者 98.3.24～98.5.22	エネルギー変換科 学専攻 井上 教授

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 受 託 研 究 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

所 属	研究担当者	研究課題	委託者
社会・環境専攻	助教授 永田 豊	環境低負荷型の社会システムの創造	科学技術振興事業団 理事長 中村 守孝
応用科学専攻	教授 岩瀬 正則	環境調和型新製鉄プロセスに関する研究	日本学術振興会 理事長 大崎 仁
基礎科学専攻	教授 若谷 誠宏	高性能閉じ込めにおける輸送機構に関する研究	日本原子力研究所 業務部長 黒岩 克彦
基礎科学専攻	教授 若谷 誠宏	磁気核融合炉の開発動向に関する調査研究	関西電力株式会社 研究開発室長 砂原 洋一
変換科学専攻	教授 塩路 昌宏	水素エネルギー社会を目指す水素製造・利用技術	日本学術振興会 理事長 大崎 仁
変換科学専攻	教授 塩路 昌宏	高効率天然ガスエンジンの点火及び燃焼方式に関する研究	社団法人日本ガス協会 会長 渡邊 宏
社会・環境専攻	教授 吉川 榮和	人的因子を含む大規模システムのモデル化と実験的検証	科学技術庁航空宇宙 技術研究所 所長 海老原 正夫
社会・環境専攻	教授 新宮 秀夫	インバース・マニファクチャリングのためのエネルギー的視点から見た最適な製品ライフサイクルの研究	財団法人製造科学技術 センター 専務理事 林 秀行
応用科学専攻	教授 岩瀬 正則	雑固体廃棄物の一括熔融処理に関する高温物理化学的研究	動力炉・核燃料開発事業団 業務部長 芹沢 逸夫
応用科学専攻	教授 小野 勝敏	鉄基固溶体による熱電変換素子	科学技術振興事業団 理事長 中村 守孝
社会・環境専攻	教授 新宮 秀夫	「スーパーメタルの技術開発」アモルファス構造制御材料創製技術・高密度エネルギー相制御技術のための基礎研究	次世代金属・複合材料 研究開発協会 理事長 増田 信行

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 共 同 研 究 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

所 属	研究担当者	共同研究事項	申請者
変換科学専攻	教授 井上 達雄	金属の加工変形解析手法に関する研究	新日本製鐵(株) プロセス技術研究所
応用科学専攻	教授 塩津 正博	ナトリウムの沸騰開始過熱度と限界熱流束に関する研究	動力炉・核燃料開発事業団
応用科学専攻	助教授 福中 康博	微小重力下での電極界面現象の観察に関する研究	(財)宇宙環境利用 推進センター
応用科学専攻	教授 岩瀬 正則	白金族金属間化合物の液体金属抽出特性に関する研究	動力炉・核燃料開発事業団
社会・環境専攻	教授 吉川 榮和	インタフェースでの認知情報処理特性に関する研究	三菱電機(株) 産業システム研究所

科学研究費補助金

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 科学研究費補助金 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

研究種目	職名	研究代表者	研究課題
特定領域研究(A)(2)	教授	八尾 健	キラルらせん構造を持つ電子導電性無機結晶を用いた不斉認識電極界面の設計
基盤研究(A)(2)一般	教授	伊藤 靖彦	凝縮プラズマ系の電気化学的・分光学的基礎研究
	教授	新宮 秀夫	フラクタル構造を有するバルク多層材料の作成とその物性
	教授	井上 達雄	境界と界面移動を伴う溶融・凝固の巨視的・微視的力学の構築と溶接・接合への応用
基盤研究(A)(2)展開	助手	日下 英史	固体-油-水3相系の界面現象を利用した固体超微粒子の分離精製法の開発
	教授	八尾 健	水溶液合成法による固体電解質型燃料電池の開発
	教授	小野 勝敏	四塩化チタンのマグネシウム連続還元プロセス
基盤研究(B)(2)一般	教授	池上 詢	不均一混合気の着火機構に関する研究
	助教授	鈴木 亮輔	減圧窒素プラズマによる溶鋼スクラップからの脱銅精錬
	助教授	田中 功	セラミックス粒界結合の局所EELS法による実験的評価
	助教授	富井 洋一	凝縮プラズマ系における結晶成長微細機構の解明
	教授	西山 孝	都市近郊鉱山における環境管理と計画的採掘
	教授	前川 孝	強収束短ミリ波入射による磁気軸上電子サイクロトロン電流駆動
基盤研究(B)(2)展開	教授	池上 詢	エネルギー有効利用のための高圧縮空気発生機関に関する研究
	教授	西山 孝	蛍光法を利用したボアホールテレビジョンシステムの開発
	助教授	鈴木 亮輔	鉄に耐酸化・耐食性のシリサイドを被覆するプロセス
基盤研究(C)(1)	助教授	石山 拓二	炭化水素の自発着火および火炎伝播過程における成分間相互作用
基盤研究(C)(2)一般	助教授	今谷 勝次	積分ペナルティ法とALE制御に基づく凝固解析における自由表面の性状予測と検証
	助教授	星出 敏彦	先進薄膜セラミックス被覆材の創成と構造・機械的特性の分子動力学解析手法の構築
	助教授	宅田 裕彦	種々の高機能鋼板の成形性およびその予測
	助教授	田中 仁	非中性プラズマにおけるエコー実験
	助教授	中村 祐司	リップルトカマク／ヘリカル系プラズマにおける三次元MHD平衡とプラズマ電流の影響
萌芽的研究	助教授	東野 達	酸性大気エアロゾルの化学状態の解明と詳細モデルによる降雨酸性化機構の感度解析
	講師	玉川 雅章	水中衝撃波によるマイクロスケールの生体組織細胞の変形挙動および損傷機構の解明
	助教授	鈴木 亮輔	高温オゾンガスによる過酸化水素生成の高温X線回折その場測定
奨励研究(A)	助教授	富井 洋一	金属窒化反応における水素の特異挙動
	助手	川那辺 洋	不均一の確率過程を考慮した乱流燃焼のCFDシミュレーション
	助教授	内本 喜晴	混合導電性酸化物緻密薄膜電極を用いた高温固体電解質型燃料電池電極反応の解明
	助手	梶原 浩一	ゾル-ゲル法による全固体無機酸化物型光起電力素子の開発

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 特 別 講 演 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

開催日	主 催	講 師	講 義 題 目
9.10.8	変換科学専攻	ポーランド科学アカデミー 基礎工学研究所 教授 Bogdan RANIECKI	半無限に広がる母相内でのマルテンサイト境界の平衡について
10.22	同 上	アルバータ大学 教授 Fernand ELLYIN	粒子分散強化金属基複合材料における疲労損傷およびき裂成長
11.4	基礎科学専攻	東京工業大学 応用セラミックス研究所 教授 吉村 昌弘	ソフト溶液プロセスによる高機能セラミックス
11.4	応用科学専攻	東北大学大学院 工学研究科 教授 井口 泰孝	エコプロセスの物理化学
11.17	変換科学専攻	ポーランド科学アカデミー 基礎工学研究所 教授 Witold Kosinski	連続体における相界面のモデル化
12.1	社会・環境科学専攻	ノルウェーエネルギー技術研究所 システム分析士 Per Christer Lund	北欧の電力プールシステム
12.17	変換科学専攻	愛媛大学工学部 教授 岡部 永年	エネルギー機器におけるセラミックス系新材料の開発とその応用
10.1.16	基礎科学専攻	ファインセラミックス技術研究組合 技術部長 前田 邦裕	セラミックス先端材料の最近の研究動向
1.16	応用科学専攻	文部省核融合科学研究所 教授 本島 修	核融合研究のフロンティア実験開始せまるLHD計画
1.21	社会・環境科学専攻	ダイセル化学工業(株) フィルター研究所長 柴田 徹	セルロース資源の有効利用と物質循環
1.23	基礎科学専攻	岐阜大学工学部 教授 箕浦 秀樹	エネルギー変換と光電気化学
1.23	変換科学専攻	東北大学大学院工学研究科 教授 長南 征二	機能性材料の医学応用
1.28	社会・環境科学専攻	電気通信大学 助教授 田中 健次	安全と危険との狭間に潜むグレイゾーンへのアプローチ －数理モデルと社会科学モデル－
2.23～2.26	応用科学専攻	トロント大学 教授 Alexander Mclean	鉄鋼製錬の研究
2.26	社会・環境科学専攻	住友金属(株) 技監 大谷 泰夫	COP3合意に対する産業界の取り組み
3.5	応用科学専攻	スイス連邦工科大学 教授 Wolfgang Fichtner	大学研究成果の産業化 －CADについての経験と洞察

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 入 学 状 況 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

平成10年度

専攻名	区 分	修 士 課 程		博 士 後 期 課 程	
		入学定員	入 学 者 数	入学定員	入 学 者 数
エネルギー社会・環境科学専攻		29	30 (3)	12	11 (1)
エネルギー基礎科学専攻		37	40	17	6 (1)
エネルギー変換科学専攻		17	21 (1)	8	5 (1)
エネルギー応用科学専攻		26	29	12	2
合 計		109	120 (4)	49	24 (3)

() 内は外国人留学生で内数

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 人 事 異 動 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

(平成9年5月～平成10年4月)

(平成9年5月1日付け)

エネルギー基礎科学専攻

助 手 梶原 浩一 (採用)

(平成9年6月1日付け)

エネルギー社会・環境科学専攻

助 手 宮藤 久士 (採用)

(平成9年7月1日付け)

エネルギー基礎科学専攻

助教授 関子 秀樹 (九州大学教授に昇任)

(平成9年12月31日付け)

エネルギー基礎科学専攻

助 手 多田 正行 (辞職)

(平成10年4月1日付け)

エネルギー基礎科学専攻

助教授 浜口 智志 (採用)

エネルギー基礎科学専攻

助 手 野平 俊之 (採用)

エネルギー基礎科学専攻

助 手 後藤 琢也 (採用)

エネルギー社会・環境科学専攻 寄附講座教員

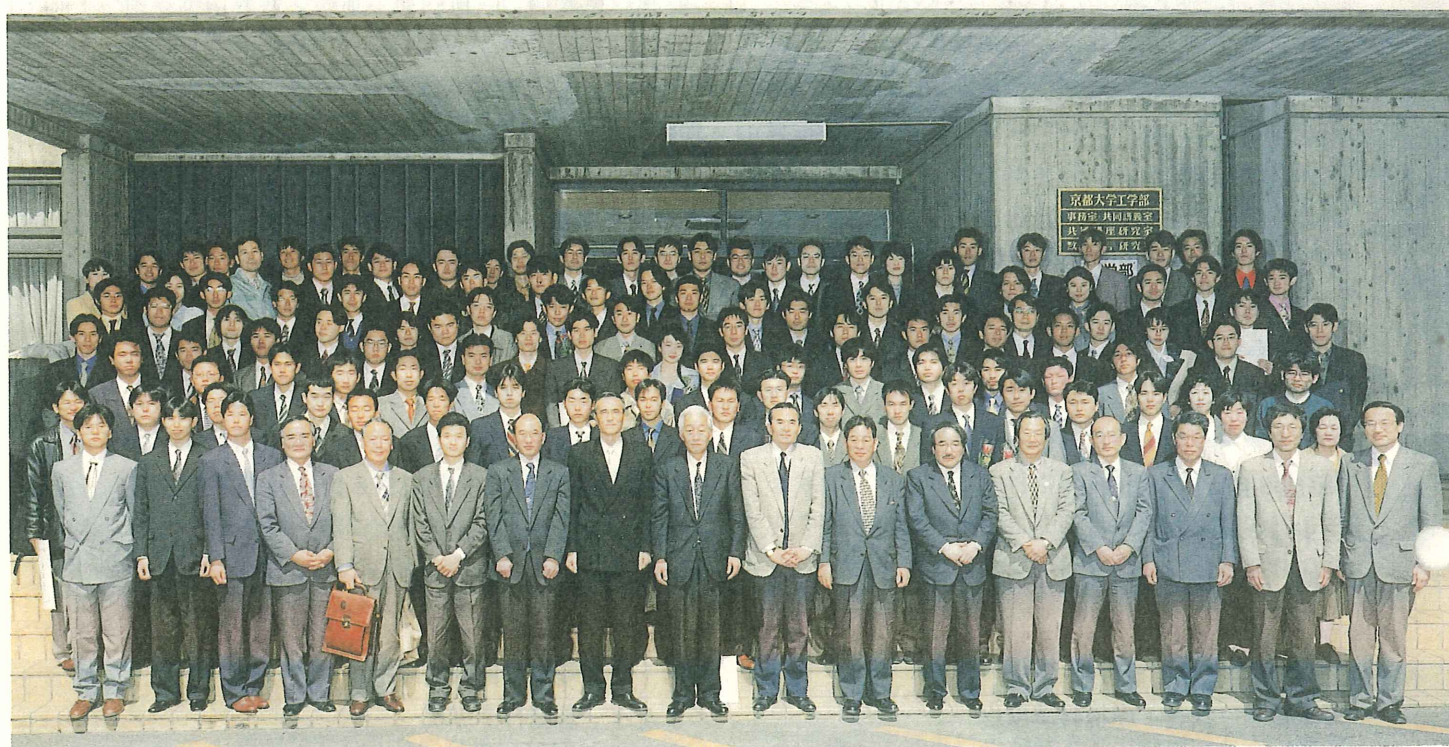
教 授 宮沢 龍雄、助教授 雷 明

(共に採用)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 修了状況等 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

平成9年度修士課程修了者数

	修了者数
エネルギー社会・環境科学専攻	27
エネルギー基礎科学専攻	39
エネルギー変換科学専攻	19
エネルギー応用科学専攻	21
合 計	106



京都大学大学院エネルギー科学研究科 第1期修了記念 平成10年3月23日

博士学位授与

平成10年 3 月23日付京都大学博士（エネルギー科学）の学位を授与された者

（ ）内は論文調査委員名

〔博士課程修了によるもの〕

山田 敏生

希薄燃焼方式火花点火機関における燃焼改善に関する研究（池上 詢・塩路昌宏・松本英治）

広瀬 研吉

世界の原子力損害賠償制度の現況と課題（神田啓治・新宮秀夫・牧野圭祐）

山本 章夫

装荷パターン最適化手法を用いたPWR炉心燃料管理の高度化に関する研究（神田啓治・吉川榮和・代谷誠治）

名迫 賢二

水素吸蔵合金のエネルギー変換機能の高度化と新規熱輸送、新冷凍技術への応用に関する研究
（伊藤靖彦・片桐 晃・尾形幸生）

平成10年 5 月25日付京都大学博士（エネルギー科学）の学位を授与された者

（ ）内は論文調査委員名

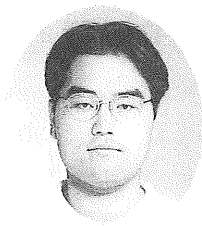
〔論文提出によるもの〕

吉岡 省二

高温型燃料電池電解質の電気化学的挙動（伊藤靖彦・八尾 健・尾形幸生）

{エネルギー社会・環境学専攻}
社会エネルギー科学講座
エネルギーエコシステム学分野

助 手 宮藤 久士
(みやふじ ひさし)



エネルギー反応学講座
エネルギー化学分野

助 手 野平 俊之
(のひら としゆき)



(寄附講座) エネルギー社会システム計画
(関西電力) 講座

教 授 宮沢 龍雄
(みやざわ たつお)



助 手 後藤 琢也
(ごとう たくや)

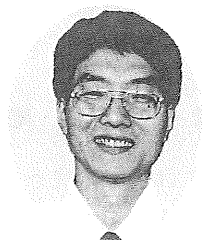


エネルギー反応学講座
エネルギー固体化学分野

助 手 梶原 浩一
(かじはら こういち)



助教授 雷 明
(レイ ミン)



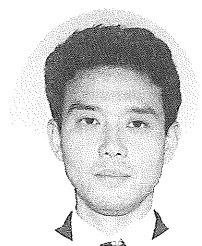
{エネルギー変換科学専攻}
(客員) 先進エネルギー変換分野

教 授 長屋 幸助
(ながや こうすけ)



{エネルギー基礎科学専攻}
エネルギー物理学講座
核融合基礎学分野

助教授 浜口 智志
(はまぐち さとし)



{エネルギー応用科学専攻}
(客員) 先端エネルギー応用学分野

教 授 Wolfgang Fichtner
(ウォルフガング・フィヒトナー)



教 官 一 覧

エネルギー科学研究科教官配置一覧表

H10.5.1 現在

専攻名	講座名	研究指導分野名	担当教官名				備考
			教授	助教授	講師	助手	
エネルギー社会・環境科学	社会エネルギー科学	エネルギー社会工学 エネルギー経済 エネルギーエコシステム学	新宮 秀夫 佐和 隆光 坂 志朗	石原 慶一 永田 豊 河本 晴雄		宮藤 久士	
	国際エネルギー論 (客員講座)			別所 泰典			日立製作所
	エネルギー社会環境学	エネルギー情報学 エネルギー環境学	吉川 榮和 笠原三紀夫	手塚 哲央 東野 達		下田 宏 山本 浩平	
	〈エネルギー社会論〉	エネルギー政策学 エネルギー社会教育	神田 啓治	中込 良廣		小野 光一、藤根 成勲 武内 孝之、林 正俊	
	〈ソフトエネルギー科学〉		牧野 圭祐	大槻 徹			
	兼 担 教 官		足立 幸男 植田 和弘				人間・環境学研究科 経済学研究科
	エネルギー社会システム計画 (寄附講座)		宮沢 龍雄	雷 明			
エネルギー基礎科学	エネルギー反応学	エネルギー化学 量子エネルギープロセス エネルギー固体化学	伊藤 靖彦 吉田 起國 八尾 健	萩原 理加 伊藤 澄子 富井 洋一		野平 俊之、後藤 琢也 梶原 浩一	
	先進エネルギー生成学 (客員講座)		藤嶋 昭	吉田 善章			東京大学
	エネルギー物理学	核融合基礎学 電磁エネルギー学 プラズマ物性物理学	若谷 誠宏 近藤 克己 前川 孝	浜口 智志 中村 祐司 田中 仁		中須賀正彦 別生 榮	
	〈基礎プラズマ科学〉	核融合エネルギー制御 高温プラズマ物性	大引 得弘 佐野 史道	水内 亨 花谷 清		長崎 百伸 岡田 浩之	
	〈エネルギー物質科学〉	物質反応化学 分子化学工学 エネルギー複合材料化学 エネルギー物質循環	尾形 幸生 原田 誠 大久保捷敏 片桐 晃	作花 哲夫 木下 正弘 小瀧 努	足立 基齊	塩井 章久 水谷 保男、原田 敏夫	
	〈核エネルギー学〉	中性子基礎科学 極限熱輸送	代谷 誠治 三島嘉一郎	三澤 毅 日引 俊		小林 圭二、宇根崎博信 齋藤 泰司	
	兼 担 教 官		曄道 恭				理学研究科
エネルギー変換科学	エネルギー変換システム学	熱エネルギー変換 変換システム	池上 詢 塩路 昌宏	石山 拓二	玉川 雅章	川那辺 洋	
	先進エネルギー変換 (客員講座)		長屋 幸助				群馬大学工学部
	エネルギー機能設計学	エネルギー材料設計 機能システム設計	井上 達雄 松本 英治	今谷 勝次 星出 敏彦		堤 三佳	
	〈エネルギー機能変換〉	高度エネルギー変換 高品位エネルギー変換 機能エネルギー変換	井上 信幸 吉川 潔 木村 晃彦	山本 靖 大西 正視		神保 光一 増田 開 山本 雅博	
エネルギー応用科学	兼 担 教 官		東 順一 山崎 稔				農学研究科
	応用熱科学	エネルギー応用基礎学 プロセスエネルギー学	野澤 博 塩津 正博	田中 功 白井 康之			
	先端エネルギー応用学 (客員講座)		W.Fichtner				スイス連邦工科大学
	エネルギー応用プロセス学	高温プロセス 材料プロセス	小野 勝敏 岩瀬 正則	鈴木 亮輔 藤原 弘康		植田 幸富	
	資源エネルギー学	資源エネルギーシステム学 資源エネルギープロセス学 宇宙資源エネルギー学	西山 孝 八田 夏夫	楠田 啓 宅田 裕彦 福中 康博		陳 友晴 藤本 仁 日下 英史	
	〈高品位エネルギー応用〉	機能変換材料 エネルギー材料物理 高品位基盤エネルギー	山崎 鉄夫 香山 晃 宮崎 健創	千葉 明朗 加藤 雄大 中嶋 隆		山本 正雄 竹内 右人 畑 幸一	
兼 担 教 官			山本 直一 玉田 攻				人間・環境学研究科

(注) 講座名欄の〈 〉書は協力講座。

日 誌 (平成9年度)

- 平成9年4月11日(金) 大学院入学式
- 4月15日(火) 専攻長会議
- 4月24日(木) 研究科会議
- 5月15日(木) 専攻長会議
- 5月22日(木) 教授会
- 6月19日(木) 専攻長会議
- 7月17日(木) 専攻長会議
- 7月24日(木) 研究科会議・教授会
- 8月4日(月) 修士課程入学願書受付(～5日迄)
- 8月6日(水) 博士後期課程入学願書受付(～7日迄)
- 8月25日(月) 修士課程入学者選抜試験(～27日迄)
- 8月28日(木) 博士後期課程入学者選抜試験
- 9月10日(水) 臨時専攻長会議
- 9月10日(水) 大学院入試合格発表
- 9月18日(木) 専攻長会議
- 10月2日(木) 教授会
- 10月16日(木) 専攻長会議
- 10月23日(木) 研究科会議・教授会
- 11月8日(土) 第1回公開講座(第1日目)
- 11月13日(木) 臨時専攻長会議
- 11月15日(土) 第1回公開講座(第2日目)
- 11月20日(木) 専攻長会議
- 11月27日(木) 教授会
- 12月18日(木) 専攻長会議
- 12月25日(木) 研究科会議・教授会
- 平成10年1月22日(木) 専攻長会議
- 1月28日(水) 公開講演会(於:経団連会館)
- 1月29日(木) 研究科会議・教授会
- 2月3日(火) 修士課程外国人留学生・博士後期課程第2次募集入学願書受付(～4日迄)
- 2月18日(水) 専攻長会議
- 2月19日(木) 修士課程外国人留学生入学者選抜試験(～20日迄)
- 2月20日(金) 博士後期課程第2次入学者選抜試験
- 2月27日(金) 研究科長選挙(第1次投票)
- 3月4日(水) 同上(第2次投票)
- 3月4日(水) 臨時専攻長会議
- 3月4日(水) 大学院入試合格発表
- 3月4日(水) 研究科会議・教授会
- 3月19日(木) 専攻長会議
- 3月23日(月) 大学院修了式
- 3月26日(木) 教授会
- 3月30日(月) 研究科専攻事務室移転(8号館から2号館へ)

さし絵、イラスト、写真の募集

編集委員会では、本広報に掲載するさし絵、イラスト、写真を募集しております。内容は、広報にふさわしいもので自作、未発表のものに限ります。
詳しくは、工学部等総務課庶務掛にお問い合わせ下さい。

編集後記

エネルギー科学研究科が創設されて以来3年目に入りました。この間、本年3月に創設後初めて修士課程修了者が社会に送り出され、また本大学院から5名の京都大学博士（エネルギー科学）が生まれました。

本号は広報の2号目にあたりますが、創刊号以後ほぼ1年間にわたる大学院の活動の様子が紹介してあります。今年5月に就任された伊藤研究科長には巻頭言を、3月31日付で退官された西原名誉教授には随想を、また平成9年度教育改善推進費プロジェクトの報告を纏めていただいた八田教授には大学院の教育研究環境の問題点について、教育研究委員長の池上教授には本大学院が初めて送り出した修士課程修了者の進路について解説を執筆していただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

大学院の充実化とともにこのエネルギー科学広報も内容をより豊かに育てたいと考えております。この広報の内容やデザインについてご助言やご指導を賜れば幸いに存じます。

(K. Y. 記)

エネルギー科学研究科基盤整備委員会・編集小委員会

委員長 吉田 起國教授

委員 新宮 秀夫教授 近藤 克己教授 松本 英治教授
野澤 博教授

東野 達助教授 内本 喜晴助教授 星出 敏彦助教授

白井 康之助教授

事務担当 工学部等総務課庶務掛